
とても長閑な昼下がり

M川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とても長閑な昼下がり

【Zマーク】

Z0274F

【作者名】

M川

【あらすじ】

半年前に会社を辞め、無職をこじらせていた僕は、とうとう勇者になつた。ヤクザな聖剣に脅迫された僕は、だから隣の町まで魔王を討伐しに行く。

今から約半年前に『なんとなく色々と嫌になった』という理由で唐突に会社をやめてから僕は無職だったのだけれど、昨日、巨大な岩に刺さっていた600年前の聖剣を抜いたことによつて僕は勇者になつた。人生、どのタイミングで何が起こるか、分かつるものじゃないね。

どういうわけだか知つたことじやないけど、その剣には意志が宿つてゐるらしく、勇者である僕の頭に直接言語で語りかけてくる。剣が言うには、3年前に復活した魔王のせいでの現在この世界は着実に破滅の一途を辿つてゐるらしい。

日々の食費も危うい僕としては、世界の危機なんかに関わつてゐる場合じやないと思ったのだが、しかし勇者の使命は決して放棄できぬものなのだと。剣は言つ。もしも僕が勇者であることをやめようとしたならば、その時は自らの魔力で僕を呪い殺すのだと。随分とヤクザな聖剣もあつたものだね。

僕は呪い殺されたくないので、しかたなく世界を救うことにする。

「で、魔王つてのはどこにいるわけさ」僕は、勇者としての経歴は再就職する際に必要な職務履歴書に書いても良いものなのだろうかとボンヤリと考えながら剣に訊く。剣は僕の頭に直接、魔王の館の住所を送りこんできた。偶然にも魔王の館は、僕の家の近所にあつた。歩いて10数分の距離。まあ、なんて好都合。これなら書店に行くついでに世界を救えるね。

「じゃあ行こうか」僕は聖剣を右手で引っつかんで、サンダルを

履きで出かける。関節部分の擦り切れたジャージを身に纏つて。

濃灰色のアスファルトの欠片を爪先で蹴飛ばしながら僕は魔王の館へ向かう。途中、犬と散歩をしている老人や、学校帰りの小学生とすれ違った。僕の右手の聖剣に、何らかの反応を示すだろうかと思つたけれど、顔色一つ変えないノーリアクションであつたため、どうやらこの剣は僕にしか見えていないらしいと結論付ける。きっと、選ばれた者にしか見えないんだな。うん、ありがち。

聖剣のナビゲートに従つて僕は着実に魔王の館へと歩を進める。電線の上でカラスが等間隔に並んでいた。きっとどこかの神経質な輩が正確に並べたのだろう。結構いるよね、物の配置バランスに異様な拘りを見せる人。

長閑なお昼過ぎ。どこからか焼き魚の香ばしい匂いが漂つてくる。そういうえば、最近はコンビニの弁当ばかり食べていて、焼き魚なんて久しく口にしてないな。用事をすませたら、スーパーに寄つて秋刀魚でも買って帰ろうか。えっと、用事つてなんだつけ。ああそう、世界を救うのね。うへへ。だるいなあ。勇者つて大変ね。

大欠伸をしながら歩いていると、不意に剣が告げる。目的地に到着したぞと。

「マジで？ 館なんてないじゃん」 何も、ドイツのノイシュヴァンシュタイン城みたいなのを想像していたわけじゃないが、僕の目の前に或るこの建造物はあまりにもあんまりだ。いかにも中流家庭な感じの、じんまりとした平屋。グレーの屋根に、黄の強いクリーム色の外壁。これ以上にないほど、普通の家だ。おもちゃみ的な小さな門扉の脇には『石田』と書かれた表札。どうやら魔王の名は石田さんというらしい。

「ホントにこれが魔王の館なの？」僕が念を押すと、聖剣も無駄に威厳たっぷりの口調でそれを肯定する。もしもこいつが人間だったら、カイゼル髭を生えていたに違いない。伊藤博文みたいなところで、僕は伊藤博文と板垣退助の見分けがつかない。激しくどうでもいい話だね。ごめんなさいね。

僕はインター ホンのボタンを押そうとして、躊躇する。こういう場合、応対に出た人間に、なんて言えば良いんだろう？ 素直に、魔王を退治しに来ましたとでも言えれば良いのだろうか？ んな阿呆な。ただ、残念ながらここでマゴマゴしていても仕方がない。こういう場合は流れに任せるのが一番だぜってんで、僕は半ばやけくそにボタンを指先で押し込む。ポチン。あーあー、押しちゃったー。

「はい」インター ホンのスピーカーから女性の声。表札が偽りのないものであれば、彼女が石田さんなのだろう。

「あのー、突然すみませんけど、ちょっとお訊きしたい事がありまして」

「失礼ですが、どちら様ですか？」

「えつと、名乗った所で御存知ないと思いますけど、僕は緒方つて言います。隣町の者です」

「用件はなんですか？」

「ええ、ですから、ちょっとお訊きしたい事が

「セールスなら結構ですよ」

「あ、そういうのじゃないです」

「今、料理をしてるといつなので、手短にお願いします」

「えっと、なんていうか、その一、あれですよ、あはは、……魔王の」

「あのー、その件でしたら、もう勘弁して頂けませんか」そう言つてインター ホンの向こう側で石田さんは、明らかにうんざりしたような溜息をついた。「は?」とか「意味が分かりません」といつたような返答を予測していた僕にとつて、この言葉は意外だった。

「その、あなたが、あの、魔王なんですか?」

「ええ、そりですけど。じゃあ、あなた、勇者ですか?」

「あ、はい。昨日なつたばかりで」

「聖剣に唆されたのか脅されたのか知りませんが、私を殺しにきたと」

「ええ。後者で」

「取り敢えず、『もひこんな不毛な事はやめませんか?』と聖剣に伝えてくれます?」

「あ、はい」

僕は石田さんの言葉をそのまま剣に伝える。剣は否と答えた。

「無理だと黙つていますが」

「……仕方ないですなえ。少々お待ちくださいね」

「はあ」

言われたとおり、少々お待ちしていると、門の向こうの板チョコ
みたいな扉がガチャリと開いて、仲から痩せきすの三十歳くらいの
女性が現れた。石田さんだらう。

「お入り下さい」

「あ、良いんですね？」

「本当はあんまり良くないんですけど、仕方ないです」

「すみませんね、ホントに。ワガママな聖剣で」

僕は会釈してその家の中、魔王の館に入る。こんな昼食時に急に
押しかけたりして、すげえ迷惑だつたことだらう。正直、恐縮した。

居間に通される。薄型の液晶テレビがついていて、無駄に淫靡な
雰囲気の昼のドラマがやつっていた。

「しばらくそこに掛けていて下さい。作りかけのお昼ご飯が出来
上がるまで。あ、緒方さん、でしたけつけ……、あなたも召し上が
りますか？ チャーハンですけど」

「あ、いえ、お構いなく」

「そつぱりとも。私だけ食べるのもなんか変じゃありません？」

「勝手に押しかけた僕がそもそも変なので」

「あ、それは確かにそうですね」

僕は、なんだよ納得するのかよとこつ言葉を飲み込み、微笑んで頷いておく。

「でも、お茶ぐらにはお出しますよ。珈琲と紅茶、どちらが良いですか？」

「すみません。じゃ、珈琲で」

石田さんはキッチンで料理の続きを開始した。居間とキッチンは壁で区切られていないため、彼女の後姿が僕の位置から観察できる。無防備だ。世界を破滅へと導くはずの魔王が、無防備な背中を僕に見せている。

勇者としての僕は、あの背中に聖剣を突立てば良いのだろ？

それってどう考へても非道だよね。勇者っぽさは微塵も感じられないなあ。どちらかといつと、それは悪党の行いだ。ま、『勇者』の対偶が『悪党』というわけでもないので、同時にその2要素を兼ね備えていても矛盾は生じないかもしれないけれど、でもやっぱり悪党は嫌だなあ。

観測者がいて初めて善行や悪行といった評価が成立するのだから、

第三者の存在しない今現在、僕が石田さんに突然切りかかったところでは何一つ問題はないのだと、剣は言つ。レベルの低い詭弁だ。この聖剣にとつて、僕は僕自身の観測者の集合に含まれないのだろうか。

僕は基本的に独善的な人間だ。他人の納得以上に自分の欲求を優先する、性質の悪い自己満足野郎だ。だから、それ故に自分の許せない行動は絶対にとらない。僕が悪党になる事を、僕が観測することを、僕が嫌い、僕が拒否した。それで充分だ。もしも石田さんが世界を滅亡に導く魔王としても、僕は彼女の背中に切りかかつたりはしない。僕がそれをしないと滅んでしまうような世界ならば、どうぞ好きなように滅んでしまえば良い。

それでも、僕が勇者であることを放棄しないのはやはり、聖剣に呪い殺されたくないからだ。世界の滅亡さえ些事だと思えるのに、僕はこの剣の呪いを恐れているのだろうか。否、別に剣が呪い殺すというのならば、それはそれで構わないのだ。僕はただ、無職であるよりも、勇者でありたいと思った。魔王を殺すことで勇者といつ立場を継続できるのなら、それも悪くないかなと思った。それだけなんだ。

「どうぞー」僕の目の前に珈琲が置かれた。

「あ、どうも。頂きます」

「砂糖とミルクは入れますか?」

「いえ、僕はいつもブラックで飲むので」

「そうですか」

石田さんが僕の向かい側に座つて、『ま油の香りのする卵チャーハンを食べ始める。

僕は珈琲を一口飲んでから口にした。「あの、石田さん」

「はい?」

「魔王、なんですよね」

「ええ、そうですよ

「世界を滅ぼせよ!」?

「はい、そうですが。えっと、それが何か?」

「あ、ただ確認しただけです。お気になさりす

「私と闘いますか?」

「わあ、分かりません。考え中です」

「闘うにしても、私がお皿(はん)を食べ終わるまでは、待つて下さいね」

「え、ああ、はい。それは勿論」

珈琲を啜る。

彼女が皿(はん)を食べ終えた後、僕はびくするだらうか。

世界を救済する為に、彼女と闘い、彼女を殺すだろうか。

それとも、戦いに敗れ、世界は滅びることになるだろうか。

あるいは、勇者であることを放棄し、剣に呪い殺されることになるかもしれない。

どの答えが出るかは、今の僕には分からない。

その瞬間にhattてみないと分からないし、分かり得ない。

物事には順序というものがあり、だから取り敢えず僕は珈琲を飲みながら彼女が昼食を終えるのを待つ。窓から差す日は暖かく、スズメの囀りが聞こえる、とても長閑な昼下がりのことだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0274f/>

とても長閑な昼下がり

2010年10月20日19時45分発行